

# 英語科教育法におけるハイブリッド授業

## —YouTube ライブとクラウドサービス MEGA の活用—

法政大学キャリアデザイン学部兼任講師 阿久津 仁史

### 1. 先行研究

#### 1.1 YouTube ライブ配信

コロナ禍の元、多くの大学で、対面授業の実施が難しくなり、オンライン授業に取り組みざるを得ない状況である。本学においてもそれは例外ではないが、教科教育法のような、将来教員になるために、教員としての資質・能力の向上を目的とした授業の場合は、オンライン授業だけでは、その効果に限界があることは異論が少なからう。そのため、本学の教職課程の授業では、ある一定の条件を満たした場合、対面授業に取り組むことが認められている。

しかし、履修しているほとんどの授業がオンライン授業であると、実家でも受講が可能のため、東京から遠く離れた実家に帰省している学生も少なくない。そのため、対面授業だけしか実施しないと、そのような学生が授業に参加できない、という事態が生じることになる。そのため、本学においては、対面授業とオンライン授業を組み合わせ、Zoom を活用したハイブリッド授業も行われている。

確かに、Zoom を用いた授業を行う大学は数多くあるが、インターネット回線等の不具合が生じた場合に、学生が受講できなくなる、もしくは、教員が配信できなくなる、というような事態も想定される。そのため、逆に、Zoom を用いた授業を原則として禁じている大学もあるが、それも無理はないと思われる。

しかし、Zoom を用いたオンライン授業を行う際に不具合が生じた場合でも、授業を録画することによって、あとからでも、学生が授業を視聴することが可能になる。そのため、そのような配慮をしている大学や教員も多々あるだろう。

その一方で、教科教育法を受講している学生が、オンライン授業の中で、模擬授業を行うような場合は、別の問題も生じる可能性がある。というのは、大学教員が行うような一般的な講義の場合は、Zoom のカメラを固定して、教員と黒板が映るようにすれば、Zoom の授業は可能になる。しかし、学生が模擬授業を行う目的は、実際の中高の現場の授業が行えるようになることであるため、模擬授業の中でも、教卓の後ろにずっといて、一方的に講義を行うような方法をとるだけでは、不十分

であるためだ。

例えば、中高の現場での授業では、教卓の後ろにずっと講義をするだけでなく、必要に応じて、プリントを配布したり、机間巡視をしたりする場合が生じてくる。しかし、カメラを固定したままで Zoom を通じて学生の模擬授業を録画するだけでは、そのような様子を録画することができず、オンライン授業を自宅で受けている学生は、その様子も分からないため、不利益を被る可能性があるのである。

そのため、カメラを固定して Zoom で授業を行いながら、その様子を録画する以外の方法を講じる必要があるだろう。というのは、Zoom を用いたオンライン授業は、カメラを固定して授業の様子を撮影することには適しているが、授業者が動き回るのを追って撮影することには適していないためである。本来、Zoom はあくまでもオンライン会議のためのツールであるから、それも当然と言えば当然であろう。

その一方で、東大 UmeeT 編集部 (2020) によれば、オンライン授業に参加している学生の約 9 割が、講義を録画して見返せるようにしてほしいと考えている。松井 (2019)、染岡 (2019) などの先行研究によれば、Zoom を用いたオンライン授業に比べて、YouTube ライブ配信であれば、録画したアーカイブに対する学生からのアクセスも簡便であり、その動画も、ほぼ永続的に保存しておくことができる。特に、YouTube のアプリは、ほぼ全ての学生のスマートフォンにインストールされていることが考えられるため、PC やタブレットがないような外出先からも、学生は授業の動画を視聴することができるメリットがある。もちろん、スマホで YouTube にアクセスした場合、動画再生に要する通信料は、莫大なものになる可能性があるため、Wi-Fi 環境がある方が、通信料の負担も少ないことは明らかであろう。

それに加えて、模擬授業を録画すれば、模擬授業を行った学生自身も、後から見直して、自分の至らない点を考えることができる。しかし、Zoom だと、録画時間に制限があり、14 回分の授業を全て保存して、後から見直すためには、別に料金がかかることになり、学生にとっては、大きな負担となる可能性もあるのである。

また、YouTube の動画配信サービスを用いた教材つ

くりの例としては、許(2019)、小野(2020)、多賀(2020)、半田(2020)など、枚挙にいとまがない。しかし、YouTube ライブ配信機能を用いた実践例は、前述した松井(2019)、染岡(2019)の2例に過ぎず、教科教育法の授業で、学生に模擬授業を行わせながら YouTube ライブ配信をする例は見当たらない。以上の点を踏まえて、YouTube ライブの配信を用いたハイブリッド授業を実施した。

## 1.2 クラウドサービス MEGA

対面授業に参加できる学生は、教室内で模擬授業を実施することができるが、オンライン授業に参加している学生は、自宅で模擬授業を行うことしかできない。その様子を録画して、それに対してフィードバックをする必要があろうが、動画の録画は、通信料が膨大になる上に、その動画自体の容量も膨大になり、他の学生が視聴するために、メールに添付させることも不可能である。もし、その動画を細かく分けて提出させることができたとしても、Hoppii の教材にアップロードするためには、20MB 以下という制約があるため、一人の学生の動画ファイルの数が多くなり、履修学生全体の動画をアップしようとする、膨大な数のファイルになってしまう。

福井(2020)によれば、Dropbox というオンラインストレージサービスを用いれば、ファイルの共有も容易であるため、春学期は、各学生に、指定教科書の内容を分担して Powerpoint でまとめさせて Dropbox に提出させた。しかし、Dropbox の無料で使える容量は、わずか 2GB で、各学生の動画ファイルをアップロードさせるには、容量が全く不足しているため、動画ファイルの共有のためには実用的であるとは言えない。

そのため、MEGA というクラウドサービスの活用を考えた。MEGA は、50GB までの容量を無料で使うことができ、英語科教育法を履修している学生と筆者でファイルを共有することができるためである。他にも、共有ファイルを活用できるクラウドサービスには、TeraCLOUD、Google Drive、MediaFire などがあるが、50GB の容量を無料で活用できるのは、MEGA 以外にはない。

また、パソコンとオンラインストレージを同期するアプリ MEGAasync をインストールすると 20GB、友人を招待すると 10GB、モバイル用アプリをインストールすると 15GB が追加される設定になっている。確かに、学生を 10 人招待すれば、100GB 追加されるが、そこまでの容量を使うことができる日数は、180 日と決まっているため、実際には、担当している学生を教えている間程度しか使うことができないことに留意する必要がある。

加えて、前述したように、模擬授業を学生が録画した動画も、動画の URL を配信することによって、パソコンにダウンロードすることなく視聴することができるという利点もあるのである。

もちろん、Google Classroom を活用すれば、学生の模擬授業や指導案等をアップロードすることは可能であるが、筆者は兼任講師であり、今年度はたまたま英語科教育法を担当することができたが、来年度以降の担当は未定である。そのため、学生のファイルを保存しておくために、Google Classroom ではなく、MEGA の活用を考えた。

## 2. 研究の目的

以上の点を鑑みた場合、2021 年度の授業に関しても、2020 年度と同様に、ハイブリッド授業に取り組みざるを得ないことが考えられる。特に、教科教育法のように、学生に技術を習得させることを目的としている場合は、より一層、充実したハイブリッド授業が求められるであろう。

そのため、本研究では、2020 年度の英語科教育法で用いた YouTube ライブを用いた授業、特に、学生の模擬授業とそれを支えるために用いた MEGA というクラウドサービスの効果と有効性を探り、2021 年度以降の授業づくりの一助とすることを目的とする。

## 3. 授業方法

### 3.1 模擬授業テーマ

秋学期の英語科教育法、全 14 回のうち、10 月以降に行った授業の 13 回の授業で、YouTube ライブの授業を実施した。そのために、以下のような計画で、学生に模擬授業を実施させた。ただし、コロナウイルスの関係で、春学期の教育実習が秋学期の途中になってしまった学生がいたため、その学生には、教育実習終了後にその報告をさせたため、模擬授業の回数が少し減ってしまった。

- (1)第1回模擬授業：ペアかグループで模擬授業 テーマ：ウォーミングアップ(中・高)
- (2)第2回模擬授業：ペアかグループで模擬授業 テーマ：新出言語材料導入(と練習)(中・高)
- (3)第3回模擬授業：ペアかグループで模擬授業 テーマ：新出単元(教科書)導入(と展開)(中・高)
- (4)第4回模擬授業：ペアかグループで模擬授業 テーマ：コミュニケーション活動の導入(と展開)(中・高)
- (5)第5回模擬授業：単独模擬授業 テーマ：(1)~(4)の組み合わせで自由に設定

- (6)第6回模擬授業：単独模擬授業 テーマ：(1)～(4)の組み合わせで自由に設定
- (7)第7回模擬授業：単独模擬授業 テーマ：(1)～(4)の組み合わせで自由に設定
- (8)第8回模擬授業：単独模擬授業 テーマ：(1)～(4)の組み合わせで自由に設定
- (9)第9回模擬授業：単独模擬授業 テーマ：(1)～(4)の組み合わせで自由に設定
- (10)第10回模擬授業：教育実習報告と単独模擬授業 テーマ：(1)～(4)の組み合わせで自由に設定
- (11)第11回模擬授業：単独模擬授業 テーマ：(1)～(4)の組み合わせで自由に設定
- (12)第12回模擬授業：単独模擬授業 テーマ：(1)～(4)の組み合わせで自由に設定
- (13)第13回模擬授業：単独模擬授業 テーマ：(1)～(4)の組み合わせで自由に設定

### 3.2 学生に対する指示内容

前述したテーマに沿った模擬授業を行わせたが、テーマを与えるだけでは、行うことは難しいと考えられるため、次のように学生に指示をした。

- ①ペアやグループで話し合っ、どの単元を行うか考える。オンライン授業で一人の場合は、自分で考える。
- ②第1回のテーマは、「ウォーミングアップ」なので、教科書は不要。もちろん、使うの可。
- ③第2回以降は教科書を使うことが推奨される。ただし、必ずしも使わなくても良い。
- ④制限時間は、1グループ20分以内。単独授業の場合は15分以内。
- ⑤一人でやる場合は、参加者の反応は省略しても構わないし、自分で反応を言うの可。
- ⑥準備するもの：指導案・台本・ワークシート・教科書のコピー（台本以外はMEGAにアップする）
- ⑦配布資料以外に、使いたい教材がある場合、例えば、実物や写真などを用意しても良い。
- ⑧必ず、台本を作成すること。ただし、台本の通りに授業を進めなくても良い。
- ⑨台本に沿って、板書計画を考え、台本を見なくても授業ができるように必ずリハーサルしておくこと。
- ⑩パワポを使って模擬授業を行っても良い。

### 3.3 学生に指示した留意点

- ①完璧なものを目指す必要はないが、最低限、台本は頭に入れること。
- ②今、自分ができるベストだと思うものを作り上げること。
- ③自分が教育実習で教える生徒を想像して、生徒にとって良いと思う授業をやること。

- ④授業の様子は、YouTube Live で限定公開する。オンライン授業受講者は、Hoppii の「英語科教育法」のお知らせに、URL をアップするので、それをクリックして視聴すること。
- ⑤なるべく、家の PC で見る。というのは、スマホでも視聴できるが、通信量が膨大になり、ライブが止まったりする可能性もあるので、より電波が強い方がその可能性が減るため。
- ⑥授業終了後、授業内掲示板に、各回の授業の感想を、模擬授業者別に投稿すること。

### 3.4 学生に指示した MEGA への提出方法

- ①期限：模擬授業前日の 18 時までに MEGA にアップすること。
- ②提出物：指導案・補助資料（ワークシートなど）・教科書のコピー（扱う部分のみ）・その他（必要なもの）
- ③オンライン授業受講者は、自分の名前のホルダーに動画もアップすること。
- ④授業参加者は、授業開始時刻までに、MEGA にアップされた全員分の資料をプリントアウトするか、パソコンにダウンロードしておくこと。

### 3.5 YouTube ライブ配信上の留意点

まず、YouTube のアカウントを取得してから、YouTube ライブを行うことができるようになるためには、YouTube の許可を得る必要がある。その承認に、約 1 日かかるため、授業の直前に申請して、すぐに YouTube ライブを行うことができるわけではないことに留意する必要がある。

次に、YouTube ライブの公開の仕方には、公開と限定公開という二つの方法がある。学生の模擬授業を配信するため、学生のプライバシーの保護のため、必ず限定公開にする必要がある。限定公開の場合は、その URL を知っている者しか視聴することができないため、Hoppii の「英語科教育法」のお知らせに載せられた URL を知らないと視聴できないのである。

また、YouTube の動画を日常的に配信していて、フォロワーが 3000 人以上いる場合は、スマホからの配信も可能であるが、そうでない場合は、パソコンからしか配信ができない。そのため、パソコンのカメラを使用する場合は、カメラの解像度や位置がかなり限定されることに留意する必要がある。

さらに、マイクも、パソコンの内臓マイクの感度は、かなり低いため、すぐそばで話せば感知するが、少し離れると、音声を感知しなくなる可能性があるため、その距離や発する音声の大小に留意する必要がある。

## 4. 結果

### 4.1 学生の感想

本授業においては、毎回の授業終了後に、各学生に、「英語科教育法」の「授業内掲示板」に、模擬授業ごとに感想やコメントを匿名で投稿させ、その投稿をもって出席扱いとした。その感想に加えて、最終レポートの中の学生の感想を分析した。ただし、最終レポートの未提出者もいるため、全ての感想を分析したわけではないが、学生の感想は、主に次の4つに分類される。

#### (1) オンライン授業参加者と対面授業参加者の模擬授業の質の差

「対面とオンラインで1人と2人という違いはあるにしても、一部で模擬授業のレベルに明らかに偏りがあるように感じました。」

これが、代表的な学生の感想である。本講義は、英語科教育法なので、各学生が英語の授業ができるようになることが求められる。そのため、春学期の授業で視聴した様々な英語の授業を踏まえて、秋学期には、各学生が模擬授業を行った。しかし、対面授業参加者は、模擬授業の内容をペアやグループで話し合ってから模擬授業を行うことができたが、オンライン授業参加者は、自分ひとりで模擬授業の内容を考えて実演し、その動画を投稿した。そのため、どうしても、特に、オンライン授業参加者の模擬授業のレベルは、かなり差が生じてしまった。筆者にメール等で質問する学生もいたが、一人で授業づくりを考えることの限界であろう。

#### (2) YouTube ライブ配信の難しさ

「初めてオンラインの形で授業を受けましたが、ネット環境により飛び飛びであったり、画質が悪く黒板の字が見えないなどオンラインで受けている学生の現状を知りました。」

「初めてオンラインで授業を受けましたが、オンライン上からでもその場の楽しそうな雰囲気が伝わってきて授業の感じが思ったよりつかめて良かったです。」

「オンラインという形での参加であったため、電波が悪く、しっかりと一語一句は聞くことができませんでしたが、組織として働くことを意識した受け答えなどいくつかポイントを説明してくださりありがとうございます。」

これらが、代表的な学生の感想である。春学期の授業は、全てオンラインで行い、筆者と学生の音声入りのパワーポイントをクリックしたり、YouTube 上の中高の英語の授業を視聴したりする内容であった。その一方で、秋学期の授業では、YouTube ライブ配信の授業であったため、ネット環境や内臓カメラの画素数などの問題で、画面の解像度が低かったり、動画が途切れるなどの問題が生じてしまった。

#### (3) 対面授業の良さ

「本当に対面でしか得られない実践的な内容と口伝えで、非常に充実しておりました。」

「模擬授業のような対面じゃないとわからない気づきや、実践を通してまだまだ未熟だと思う反面、他の方達から良いところを吸収したり自分の反省をしたりする中で成長もあったと思います。」

これらが代表的な学生の感想である。オンライン授業に比べて、対面授業の方が、パソコンやスマホなどの画面だけでは分からない生の情報を授業参加者が得ることができるため、「対面でしか得られない」という感想は、ある意味当然であろう。

#### (4) 本授業での学び

「指導案の作成からプリントの作成、また20分という模擬授業の中で、何を発表するのか真剣に考えることによって、毎回のグレードが上がったのではないかと思います。また、途中で group を混ぜることによって、新しいアイデアや知識を吸収して、非常に楽しくためになる時間を過ごせました。」

「どの授業も楽しく、面白く、そしてその中に学びがあるという授業であったなと思いました。はじめの頃とは考えられないくらいどの授業も工夫されていてすごいなと思います。」

これらが代表的な授業の感想である。これらの感想に対する、対面授業参加者かオンライン授業参加者かによる差を検証することは難しい。それぞれの参加者なりに本授業の中での学びがあったことが推察される。

### 4.2 YouTube ライブのメリット

Zoom と比較して、YouTube ライブ配信のメリットは、何と言っても、視聴と保存の簡便さであろう。URL さえ知っていれば、何度でも視聴できる上に、YouTube のアーカイブには、ほぼ無限と言っても良いくらいの動画がいつまでも保存できる。そのため、模擬授業者が、自分の授業改善のために、その動画を視聴して、次の授業に活かす、ということが、ほぼ永遠にできるわけである。特に、動画の URL さえ知っていれば、動画をダウンロードする必要がないため、スマホでも視聴できることは、スマホの活用にたけている昨今の学生にとっては、とても魅力的であるようである。

### 4.3 YouTube ライブのデメリット

まず、YouTube ライブを実施するためには、通信量が膨大になるためか、本学のインターネット回線を使用しても、実施することができない。そのため、著者個人の Wi-Fi ルーターを使用して YouTube ライブを配信した。前述した通りに、限定公開という方法を用いたが、安全性という面からは、本来であれば、個人の Wi-Fi

ルーターを用いるのではなく、本学のインターネット回線を用いるべきできあろう。

次に、大学のパソコンを用いて YouTube ライブを行ったが、大学のパソコンの内臓マイクでは音声を十分に拾うことができないため、私物の Marantz のマイクを使用した。パソコン内蔵マイクよりは明らかに感度が良く、多少離れて話しても、音声を拾ってくれた。それを踏まえて、パソコン内蔵カメラでは、画素数も小さく、十分に映像を拾うことができないことが予想されたため、私物の Buffalo の Web カメラを用いることを試みた。しかし、なぜか、外付けマイクは認識しても、外付けのカメラは、本学のパソコンは認識しなかった。筆者の設定方法が誤っているのかと思い、サポートスタッフの方にもお願いして設定していただいたが、やはりできなかった。そのため、内臓カメラを用いざるを得なかった。しかし、本学のパソコンの内臓カメラの画素数は大変小さく、教卓の後ろに立って授業を行うだけなら問題ないが、学生の模擬授業のように、板書したり、机間巡視したりするのを撮影する場合は、撮影したとしても、細かい部分が判別できなかった。筆者個人のパソコンも大変古く、内臓カメラすらなく、Web カメラの認識もできなかったため、オンライン授業参加者には、大学のパソコンの内臓カメラの解像度の低さを我慢してもらわざるを得なかった。

また、YouTube ライブ視聴者は、リアルタイムの質問がしにくい、という問題がある。確かに、YouTube ライブ配信を行っている場合、視聴者がコメントを書き込むことはできる。しかし、そのためには、YouTube ライブを配信している画面を、授業者も視聴している必要がある。しかし、筆者は、リアルタイムで行っている模擬授業を視て、終了後にコメントや指導助言を加えなければならないため、ライブ画面を視聴することは不可能である。そのため、どうしても、YouTube ライブ配信中に気づいたことは、各学生がメモをしておいて、授業終了後の掲示板への投稿の中で質問する、という方法を取らざるを得なかった。

## 5. 本研究の限界と今後の課題

本来であれば、YouTube ライブと Zoom を用いた授業の比較をするべきだが、学生にそのような実験的な授業を受講させること自体が不適切ではないかと考え、行っていない。そのため、あくまでも、YouTube ライブ配信を活用した授業であったため、その検証方法が不十分であった可能性もあるため、今回の結果を絶対視することなく、本研究の限界を検討し、今後の課題についても考察したい。

まず、英語科教育法の授業を履修した学生が、わずか

14 名であったため、一般化できるとは言い難い。というのは、わずか 14 名の学生からのアンケートを数値化して分析することは、統計的には、あまり意味がないと考えられるため、数量的分析をしなかったためである。つまり、本論は、履修学生の感想やコメントを、いわば質的に検証したに過ぎないのである。履修学生の数はコントロールすることはできないが、英語科教育法だけでなく、国語科教育法や社会科教育法などでも、同様に YouTube ライブ配信を用いた授業を行えば、履修学生の数も増え、数量的分析も意味があるものになる可能性もあるだろう。

最後に、神保・伊東（2004）によれば、英語科教員を採用する教育委員会が重視している点として、以下の点が明らかになっている。

- 英語科教員としてふさわしい人物は、「問題に対応する柔軟性」である。
- 教職として必要な資質・能力は、「教育に対する情熱と熱意」である。
- 授業場面での必要な資質・能力は、「分かりやすい授業の展開」である。
- 英語科教員として必要な能力は、「英語教授の知識」、「英語の語学的知識」、「国際理解教育の知識と教養」、「異文化コミュニケーションへの知識」である。
- 英語科教員として必要な英語力は、「英語での授業」である。

そのため、それらの資質に関しても、YouTube ライブ配信を用いた授業を通じて育成できたかどうかを検証すべきであった。しかし、当然のことであるが、それらの資質・能力は、英語科教育法の授業だけで育成できるものではあるまい。教職課程に限らず、本学の全ての授業、あるいは、教職を履修している学生の全ての生活の中で、いわば、全人的に育成されるものであろう。英語科教育法の授業では、教育委員会が重視しているそれらの資質・能力を紹介して、学生にも意識するように啓発したが、その検証にまでは至らなかった。もちろん、検証は難しいであろうが、来年度以降の全ての授業の中で、学生に意識させていくことも必要であるであろう。

## 引用文献

- 小野庄士（2020）『『教育長はこう考える 小野庄士 山形県川西町教育長に聞く 英語の教科化、YouTube で対応』 内外教育（6871）、2-3。時事通信社
- 許挺傑（2019）「初級中国語教育における YouTube 動画導入に関する学生の利用実態と意識調査：授業内容をまとめた教員自作動画の視聴を中心に」 大分県立芸術文化短期大学研究紀要 57、69-84。

- 神保尚武・伊東弥香（2004） 「全国公立中・高の英語教員募集内容と採用の観点に関する調査」 JACET 3月例会口頭発表.
- 染岡慎一（2019） 「オンデマンド教材の開発、およびインターネット配信授業の実施」 安田女子大学紀要 47, 79-88.
- 多賀三江子（2020） 「アクティブ・ラーニングを試みた漢字授業の取り組み -YouTube『部首のうた』を活用して」 早稲田日本語教育実践研究 (8), 51-52.
- 東大 UmeetT 編集部/東京大学教養学部 2年 「学生から見たオンライン授業」 「学生から見たオンライン授業」 ([nii.ac.jp](http://nii.ac.jp))
- 半田智美（2020） 「YouTube を活用した英語パフォーマンス・テスト動画の作成：CAN-DO リストの活用と中学校間教員連携を目指して」 山形大学大学院教育実践研究科年報 (11), 276-279.
- 福井しほ（2020） 「ノウハウ コロナで見えた「無駄」の多さ：Slack・Zoom・Dropbox は三種の神器（ポスト働き方改革）」 アエラ 33(21), 63-65. 朝日新聞出版
- 松井康（2019） 「視覚障害学生に対するオンライン動画（YouTube LIVE）を用いた授業効果」 筑波技術大学テクノレポート 27(1), 104-104.